

誰が誰をどれほど助けるか

——グローバリゼーション時代の倫理学——

一九七一年のジョン・ロールズの『正義論』の刊行は、倫理学（道徳哲学）にとっても、ひとつの時代を画す出来事だった。配分的正義を焦点として、倫理学の風景は大きく様変わりした。むろん、こうした概観は地道に続けられる学問的営為にたいして粗雑な見取り図を提供するにすぎないが、やはり、時代の特徴を浮かび上がらせて描き出すのにながしかは役立つ。『正義論』がどのような変化をもたらしたのかは、実存主義とマルクス主義と分析哲学が鼎立していた一九五〇—六〇年代の風景と比べれば、明らかだろう。

『正義論』をめぐる大きな争点のひとつは格差原理だった。格差原理のもとで、最も恵まれない状況に陥ったひとへの援助が、社会を形成する原理のなかにあらかじめ組み込まれる。だが、この再配分の仕組みにたいしては、リベタリアニズムが古典的自由主義の鍵概念であった国家による干渉からの自由を根拠として異議を唱えた。それによれば、他者への援助がなされ

るとしても、それはあくまで自発的な所有権の移転によって行われるべきである。さらに、特定の文化と伝統をもった共同体のなかでの自己形成を強調するコミュニタリアニズムからは、ロールズふうのリベリズムであれリベタリアニズムであれ、リベリズムの希薄な自己概念の抽象性に批判がむけられた。いうまでもなく、これはたんに理論上の争点ではない。一九八〇年代、イギリスのサッチャー、アメリカのレーガンをはじめとして、先進国の多くが自国の経済の建て直しのために、小さな政府を標榜し、種々の規制の緩和によって市場を活性化する政策を推進した。日本でも八〇年代の中曽根内閣以降、とりわけ二〇〇〇年代の小泉内閣にこの方針は顕著だった。倫理理論上の対立と異なるのは、市場での競争の厳しさを癒すために、文化的伝統を帯びた共同体への帰属意識が市場原理と合体した点である。こうした政策のもとで、強力な企業は国境を越えて多国籍化して、まさに地球全体がひとつの市場と化し、市場で

の競争の激化とそれにもなう産業のリストラクチャリングによって自国内でも、また国際的にも、貧富の格差が拡大していった。こうしたグローバルゼーションについての評価は、金融工学の失敗から、現在、急速に変わりつつある。だが、いったん成立した状況がただちに変わるわけではない。

それでは、グローバルゼーションの時代における倫理学とはどのようなものだろうか。ひとつとがたがいにたがいを支えるシステムが倫理のめざすもののひとつである以上、グローバルゼーションの時代において、誰が誰をどれほど助けるべきだろうか。この「誰が」と「誰を」は、伝統的な哲学・倫理学が共同体としてまずは念頭においてきた国家の垣根を超えるものであるかもしれない。しかし他面、国家は、なお、それに取って代わるものがないほど強力な枠組みであるようにも思われる。そしてまた、地球規模での市場における苛烈な競争のもとでは、助ける誰かと助けられる誰かの区別をけつして固定的なものと考えられない。こうした状況を意識しつつ、二〇〇八年の第三回関西倫理学会委員会において、今回のシンポジウムのテーマ「誰が誰をどれほど助けるか——グローバルゼーション時代の倫理学」が採択された。

とはいえ、この問いはあまりに大きい。したがって、この問いに切り込む切り口として、以下の論点をとりあげることにした。すなわち、その名も「ひとつの世界——グローバルゼーションの倫理学」と題する著作のなかで、ピーター・シンガーは、

ロールズが格差原理を国民国家の枠内でしか適用していないことを批判している。一方、ロールズもまたその著作『万民の法』のなかでその正義についての考えを国際間に広げて展開している。しかしまた、ここで問題となっている国家なるものやどのように捉えなおすかについて、バリバールはじめ多くの著者が論じている。そこで、今回のシンポジウムでは、ロールズの研究者である藤森寛会員、シンガーの翻訳を手がけてこられた樫原章会員、国家をめぐる考察を重ねてこられた松葉祥一会員にパネリストとしての報告をしていただくこととなった。

以下にお読みいただくように、藤森会員は、国際社会に格差原理を適用するベイツの議論とそれに懐疑的なロールズとを対比して、ロールズでは、なぜ格差原理が国際間に適用されないかについて報告し、樫原会員は、シンガーの説く世界の飢餓救済に寄与する倫理的義務の根拠を明らかにしたうえで、しかしその義務がシンガーの主張するほどに強い義務ではないのではないかという問題を提起し、松葉会員は、現行のグローバルゼーションと国民国家とのあいだの対立しつつ支え合っている関係を摘出したあとに、国家への帰属にもとづいていのではない共同性を探求している。三人のパネリストの報告のあとには、十一月一日に行われたシンポジウムでの討議のようすを、当日、司会を務めた石崎と品川が要録して掲載している。その文責は司会者であり、質問者による発言内容のチェックを経ていないために質問者の氏名は省かせていただいた。

シンポジウム当日の熱気を読者にも共有していただくことができれば幸いである。

(石崎嘉彦・品川哲彦)